

光の場

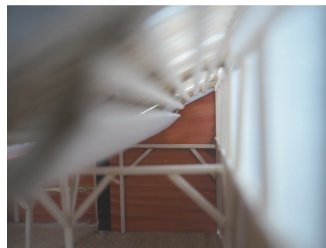
ジーンズ工場と多世代が集う場

黒田晃佑

造形建築科学コース

敷地は大阪湾南部サザンビーチ、美しい夕焼けが見ることのできる海岸である。

この敷地に異なる世代の人々が出会うきっかけとなる場所を設計しようという試みが本計画である。またこのプログラムを包む建築が天体の動き、すなわち太陽の光を捉えることによってこの場所に視覚的、身体的に時間の変化を体感できるような空間づくりを目指す。



建築デザイン／コンクリートシェル・木造軸組工法／模型 h1800×w1800mm・パネル h1800×w3000mm

県庁前こども園

公園に隣接するオフィスのコンバージョンによるコミュニティの創出

田上彩水

建築デザインコース

人口増加に向けて、コンパクトなまちづくりを理念として掲げる富山市。県庁前公園と隣接したNHK富山放送会館跡地、農協会館まで公園を拡張し、コンバージョンすることで、人々が参集する拠点をつくり、新たに生まれ変わろうとしている富山市のシンボルとなるような建築を提案します。旧農協会館には、こども園に加え、行政と連携し、一貫した子育て支援を中心に、さまざまな世代が行き交う多様なプログラムを配置します。まちなかにあるこども園は公園を日常的に活性化させ、さらに社会的ストックとして、面積や用途の容易な変更を許容することで、社会全体で地域児童を見守り、にぎわいを創出することに寄与します。



建築デザイン／模型・図面／パネル h3000×w1800mm 模型 h600×w860×d1170mm

The Future Art Museum

ホワイトキューブで出会いの場を構築する

中島晃一

建築デザインコース

美術は本来全ての人に開かれたもので、美術館も同様に全ての人に開かれているべきである。しかし、例外はあれど美術館は多くの場合、そうではない。そこで、私は多くの人に開かれた自由な場所をつくろうと目論んだ。高額で売買されるゴミクズ。ホワイトキューブ内ではゴミのようなものまでも高尚な芸術作品に生まれ変わる。私はこのアートとホワイトキューブの共犯関係、価値創造の力を利用しようと考えた。この建築ではホワイトキューブの周辺に様々なプログラムを仕掛けることでアートを中心として様々な「ひと」「もの」「こと」の出会いの場をつくりだすことを目指している。建築的には、積層建築としての美術館を目指している。ホワイトキューブと出会いの場をつなぐチューブを三次元的に構成し、目の回るような空間体験をつくり出すことに注力している。



建築デザイン／模型・図面／パネル h3000×w1800mm・模型 h852×w1630×d700mm

漸橋

村井千乃

建築デザインコース

戦後74年、富山大空襲で焼失した街はその影を忘れてしまった。私は、街と人の命が失われていた場所で生きてきたことに気がつき、日常の出来事や街について考え始めた。本提案では、富山大空襲の記憶を取める資料館を中心に人々が対話をし、日常を記録する場所を提案する。過去を知った時、この場所はどんなふうになるのだろうか。この作品を通して、過去と現在を照らし合わせながら未来について考えてもらいたい。



建築デザイン／模型・図面／パネルh3500×w1700mm 模型h500×w1770×d850mm

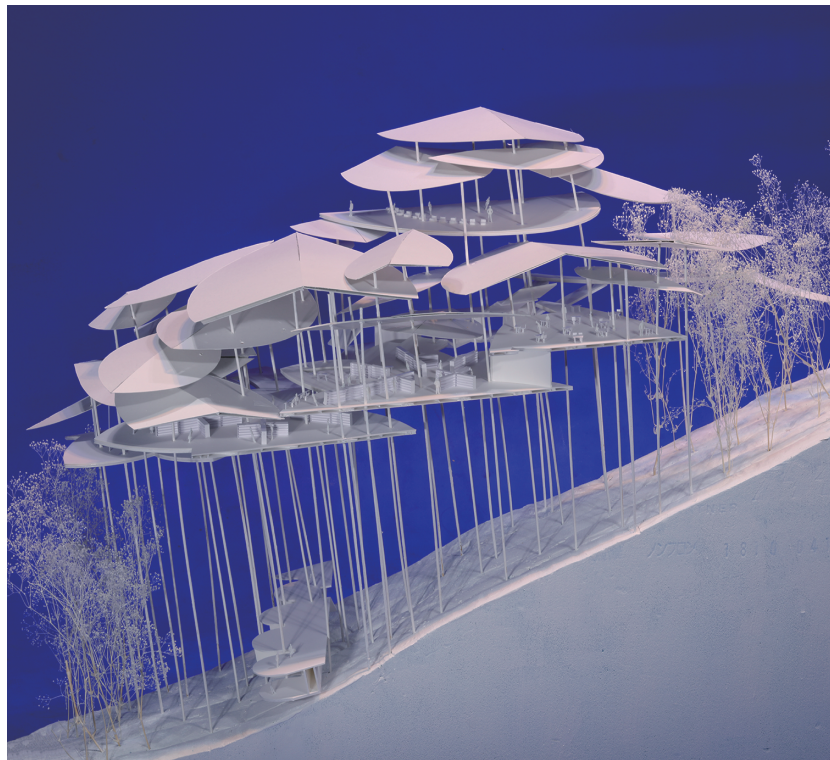
桂離宮の形を用いた図書空間の創生

山部浩樹

建築デザインコース

桂離宮は月を愛でるために天皇の別荘として建てられた。

それから約400年の月日が経ち、時代や環境が変わり、情報社会の影響によって日常はめまぐるしい速度で変化するようになった。そのような変化が激しい現代にこそ、身や心を休める、ゆっくりと時間が流れる居場所が必要なのではないだろうか。私は日常とは切り離された場所、富山県高岡市にある二上山に図書館と宿泊施設が複合した建物を設計する。設計するにあたり回遊式庭園を持つ別荘として完成された桂離宮の特徴を『形』として抽出、参照し、現在の加工技術でもって新たな空間を創造していく。



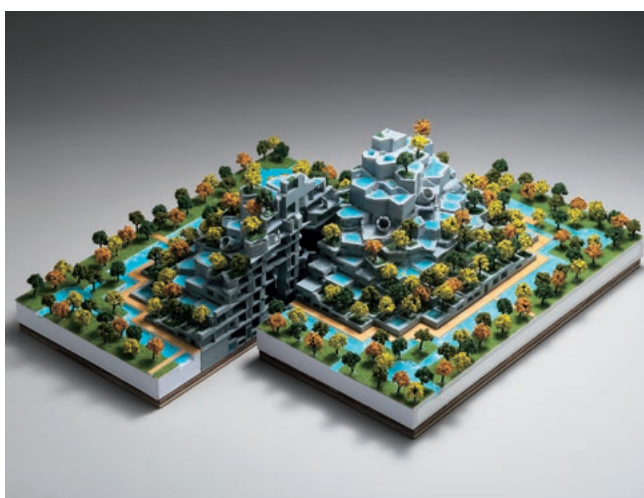
建築デザイン／模型・図面／パネル h3000×w1800mm 模型 h850×w300×d1100mm

ジャカルタ旧市街地建築の再生 — 雨水管理によるジャカルタならではの サステナブル空中庭園建築 —

技法：ライノセラフ・ベクターワークス・3Dプリンタ
 素材：PLA樹脂、スチレンボード
 h160×w400×d400mm

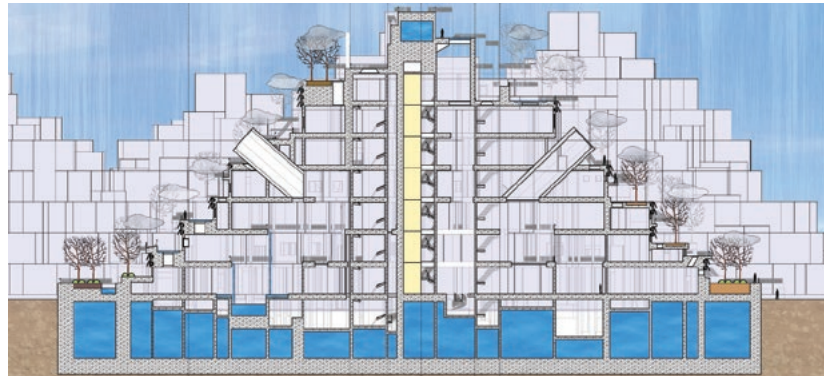
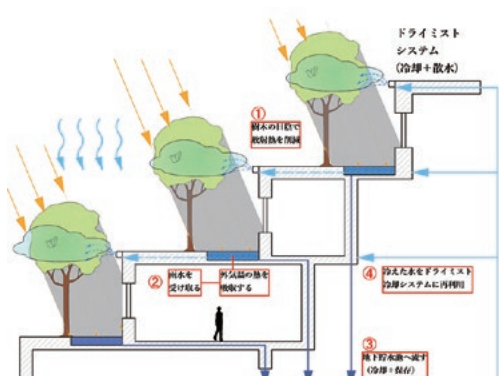
Andoko, Yosua A.P.
 造形建築科学コース

本作品は自然と建築の融合によりジャカルタのための新たな都市建築のタイポロジーに関する研究である。熱帯モンスーン気候を有しているジャカルタの平均気温は、±30℃・湿度70%以上で、蒸し暑い日々が一年中常によく続く。本研究ではこの自然環境の中でエアコンに頼らずに室内環境の質を向上させる建築の具体化を試みる。そのためにジャカルタの多い降水量と太陽光を生かしたバビロンの空中庭園のように水と緑で囲まれた建築を設計する。選んだ敷地は旧市街の元バタヴィア城廃墟である。歴史性のある旧市街地の廃墟からジャカルタの未来を新たに塗り替える伝統工芸・芸術の蕾を咲かせるために、ここでクリエイティブハブを建てる。自然豊かなこの場所はジャカルタの伝文化の拠点になり、旧市街地が地域の住民が集まる活気のある場所になることを願う。

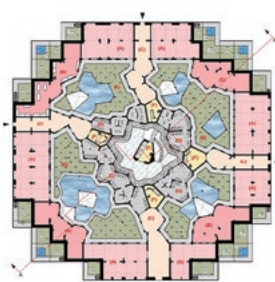


Detailed Diagram

Section



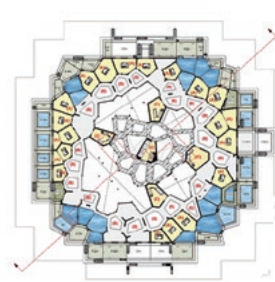
Floor Plans (1F-4F)



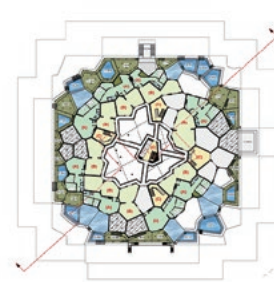
1F
Workshop



2F
Co-working



3F
Office



4F
Shophouse

UNIVERSITAS：新しい知の場

—地域再生の核として

原初の大学空間を応用する—

図面・模型

森田 哲平

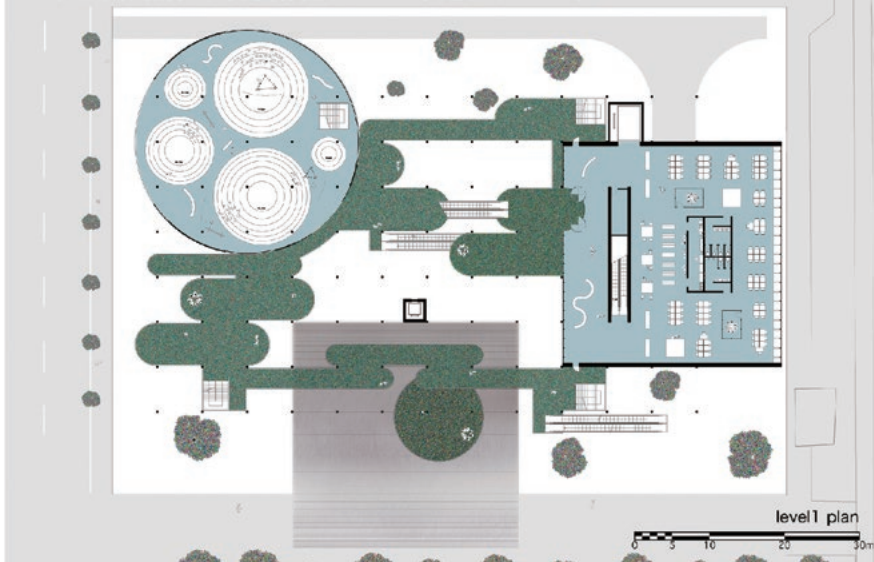
造形建築科学コース

地方都市は10年後どうなっているだろうか。さらにそこでは大学はどのような役割を負えるだろうか。中世までの大学はユニヴェルシタスと呼ばれ、教授と学生の集まりであった。彼らが、ある場所で一時的あるいは恒久的に知識を交換した時、そこに大学空間が発生した。私は立体キャンパスの中で、かつてのユニヴェルシタスのように人々が自ら場所を見つけて学び、そして様々な専門性を持った人々が侃侃諤諤と意見をぶつけ合う、そんな建築を目指して設計を行った。

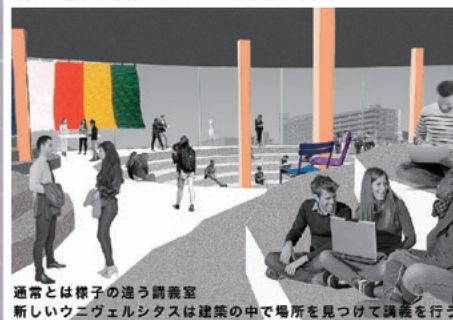
敷地は、古くから産業が栄え、様々な分野において高い技術力を持っている富山県富山市街地を流れる桜並木の続く松川・いたち川沿いの一角で、現在は駐車場である。この豊かな環境で、私は大学を知識法人として新しく設定し、アートやデザインを学ぶ学生や市民のための新しい学びの場を設計する。建築には夢や知識の偉大さを表現する力があると私は考える。地方であっても、新幹線などのインフラを用いて、健康な日常生活を背景に大都市から知をまねくことができると考える。



部屋をつなぐような床
ここでは学生だけでなく市民など様々な人々が出会い、知識の交換が行われる
この床は立体的に展開され、風を感じ光を浴びることのできる空中キャンパスとなる



市街地を流れる静かな川
富山の豊かな環境の中で人々は生き生きと学ぶ



通常とは様子の違う講義室
新しいユニヴェルシタスは建築の中で場所を見つけて講義を行う

Iwasaki, Haruka IDEC + Geo Lounge

IDEC + Geo Lounge

一糸魚川の地域防災力を

展示するための防災ハイブリッド施設

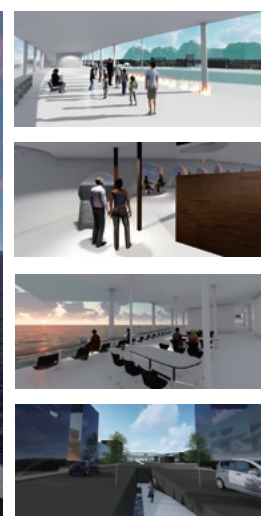
スチレンボード・スチレンペーパー
ベニヤ板・プラ板・塩ビ板
h300×w1800×d1100mm・h50×w900×d750mm

岩崎 遥華

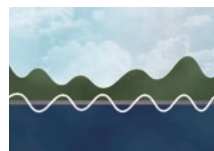
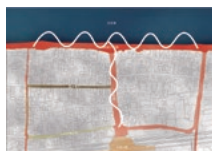
造形建築科学コース

Geibun Prize 2018 受賞

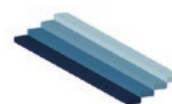
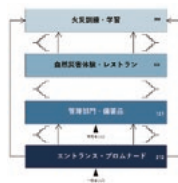
新潟県糸魚川市は 2016 年 12 月に市街地を大火で焼失した。昭和から数えるだけで既に 3 回も大火を繰り返してきた。その度に復興プランがつけられたが災害が続いた。私はこの原因を分析し、まだ誰も取り組んでいないポイントに着目した。それは、過去の大火が次の世代に伝える場所をつくり、海や川と関わりを取り戻すことである。私は、敷地を海と川の交点の人目に付くところに定め、ここに楽しく使いながら地域防災力を向上していける防災センターを提案する。山、川、海の波、燃える炎の記憶に結びついた建築形状を考え、海と接しやすく、そして糸魚川の自然を一望できるようにした。また、半世紀前に駅前を流れていた城之川を再び開渠にし、川に絡んでいくように歩行空間をつかった。また、貯水槽プールの水で霧を発生させ、視覚的に防災意識を高める。施設内部では、プロムナードに沿い、火災や自然災害に関する体験ができる。また、学習スペースや展望スペース、レストランやフィッシングコーナーがあり、糸魚川の自然を楽しめるようにしている。



DIAGRAM

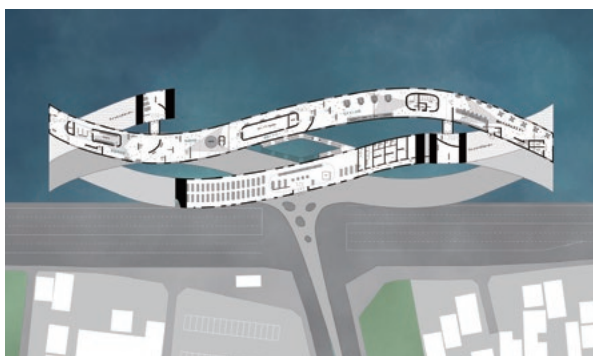


まちとうみを平面・断面的に縫い合わせていく

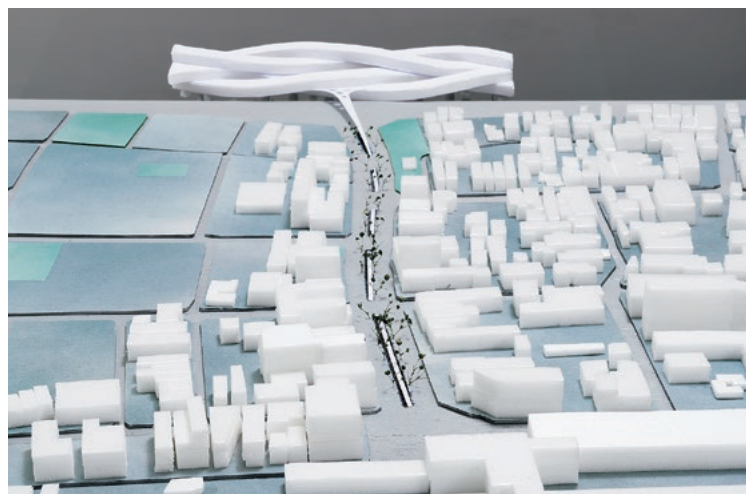


4つの機能の帯をねじって、帯をまたいだ移動を合理的に

PLAN



SITE



SECTION



Kids' realm: 成長の場としての新しい界隈を設計する

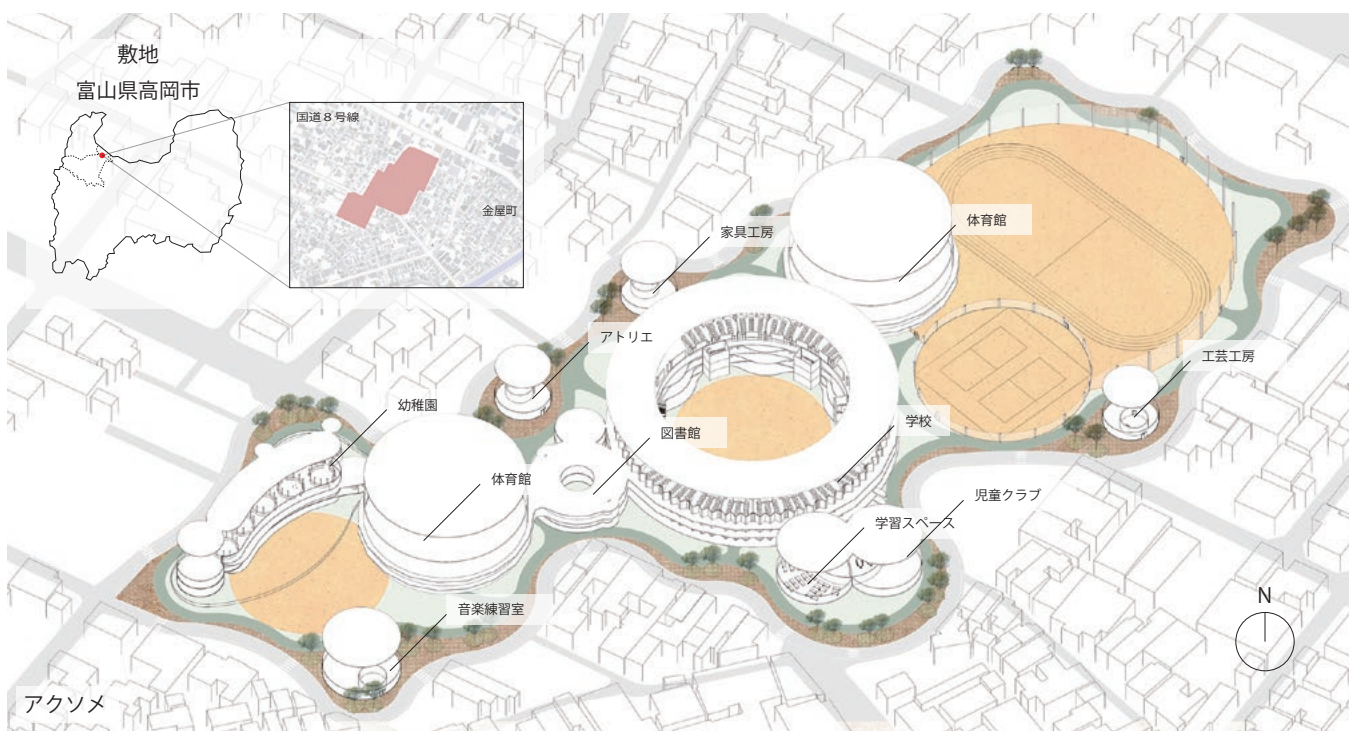
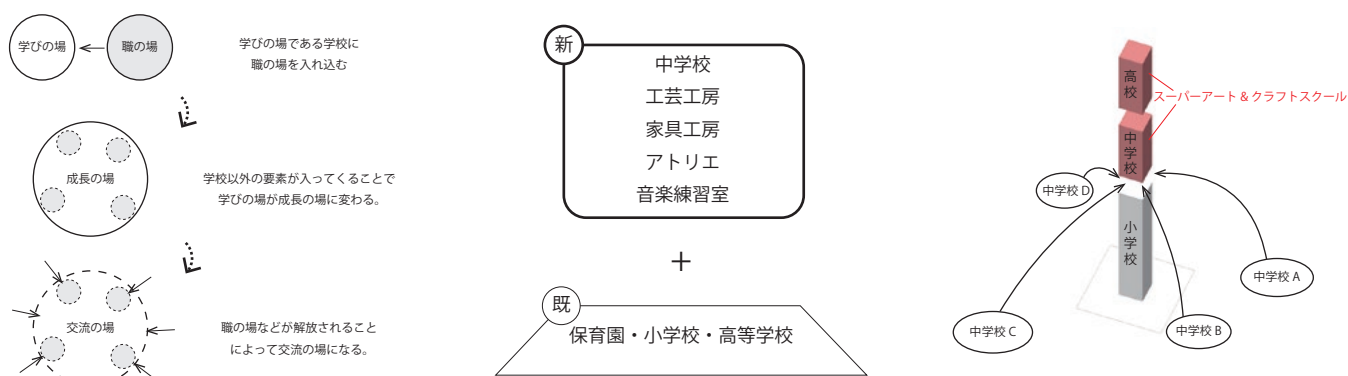
— 教育と職の相乗効果による地方都市の再建 —

図面、模型

江川 一樹

造形建築科学コース

富山県高岡市はものづくりの盛んな街として発展してきたが、現在後継者不足などにより伝統が失われつつある。そこで、教育と職の融合した新しい環境を成長の場と設定し、学校に職の場を持ち込むことで子供達に関心を持たせ、伝統的な職の後継者が増えることを目指す。子供達が工芸などのより多くのものに触れられるスーパーアート&サイエンススクール提案する。さらに、「対立を自己解決する」等为目标とする PeacefulSchool という社会性教育プログラムを利用する。具体的には、学校や工房などを円形の建築にし、それらを分棟形式で配置することで、子供達が主体的に職の場に入り込むようにし、敷地を複数のプログラムで一体的に構成する。そして、周辺部を地域に開放することで、成長の場が交流の場にもなる。こうすることで子供、働く人、地域の人が密接に関わるような地方都市ならではの魅力的な街になり、高岡を再建することにつながることを期待する。



断面図

知と地の巡環

—メガフロートの保小中一貫校で
沖島を活性化する—

図面・模型

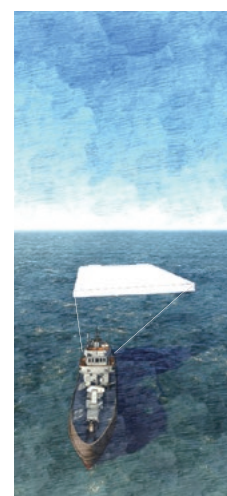
福井 美瑛

造形建築科学コース

私は過疎地域出身である。過疎地域では若者の人口減少が著しい。過疎地域には、村の存続を担う教育の場が重要である。そこで過疎化や少子高齢化が進む、滋賀県沖島の一角に、海士町の学校による地域活性の事例、神山町のサテライトオフィスによる地域活性の事例を元に、次世代を担う若者を引きつけ育てる場としての、保小中一貫校を中心とした地域拠点地を設計する。琵琶湖というポテンシャルに囲まれた自然豊かなこの島は、都心部からのアクセスも可能な場に位置する。様々な用途の棟がグラウンドを囲むように配置され、周りには人々が出会う縁側空間やデッキ広場が広がる。また、様々な棟はメガフロートをいう浮遊構造の上に立つため、水面を移動し平面形体を大きく変化させることが可能である。島の周りや琵琶湖を巡り水上に新たな拠点の場を作っていく。ここに通う子供達はメガフロートの学校で学び、島に暮らす。この学校で学び、島民と関わり、島の一人員となっていく。そして、過疎化が進む沖島を若者がいる活気ある島に変えていく。



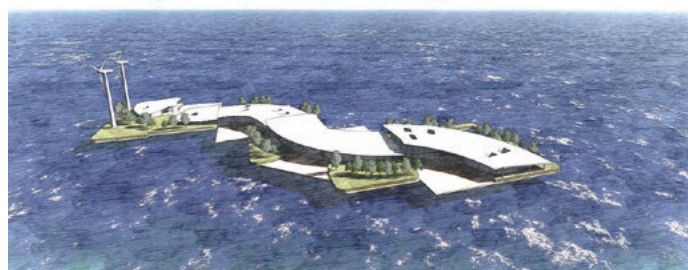
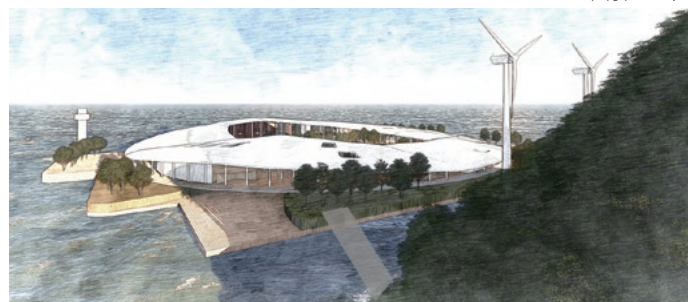
平面図



メガフロート



立面図



形態を変化させる



Kanayama, Risa *Lina Bo Bardi's Adaptive reuse design.*

リナ・ボ・バルディのアダプティブリユースデザイン

—その後期作品における建築理論への影響—

金山 りさ

造形建築科学コース

研究の背景と仮説：建築の適応性の追求

Lina Bo Bardi (リナ・ボ・バルディ /1914-1992) は、イタリア・ローマに生まれ、ミラノで“イタリアモダンデザインの父” ジョ・ポンティに師事し、建築雑誌編集の仕事に取り組んだ。その後、戦争で傷ついたイタリアを離れ、夫のピエトロ・マリア・バルディと共にブラジルへと渡り、その地に永住した。

筆者は、バルディの作品が放つ力強さと、人びとに寄り添うような優しさが感じられることに心惹かれ、彼女の建築と彼女自身に興味を持った。そして、彼女の建築作品を観察する中で、その作風の多様さに注目するようになった。『リナ・ボ・バルディの建築作品にみられる3段階の作風変化は、〈建築の適応性の追求〉という共通した目的により引き起こされたものである。』と仮説を立て、これについて深く研究することで、バルディの建築への理解がより一層深まることを期待する。

3つの作風変化：

I 近代・II ヴァナキュラー・III 甦生

第一期（1950年代）、ブラジルに渡った直後の1950年代は、“やや単純で大胆な形態”とも表現されるような、シンプルな幾何学形態で、ガラスや鉄といった素材を駆使した建築を展開する。

○代表例：ガラスの家

周囲の木々の径に同化させた柱によるピロティ / そこから伸びる軽い階段/前面のガラスファサード/リビング中央のピロティから伸びる一本の木が貫くヴォイドなど、ブラジルの自然環境と近代建築の融合が見られる。



第一期の特徴「ブラジルにおける近代建築の在り方」代表例：ガラスの家 1951 / copyright: Lina Bo Bardi : Brazil's Alternative Path to Modernism/2014/207 頁

第二期（1960-1970年代）、ブラジルの文化や民芸品への興味関心を示すようになり、1960-1970年代前後は、近代建築とブラジルの風土が融合された独自の建築を展開した。

○代表例：シレル邸

“自然とブラジルの伝統とモダニズムの融合”がみごとに表れ、バルディ独自のスタイルが確立されている。シレル邸は、そのスタイルの最初の作品でありながらも、もっともわかりやすく表現されている。コンクリートに石や貝殻が混ざり合う工芸的でヴァナキュラーな要素により、有機的な様相を呈している。



第二期の特徴「自然とブラジル文化とモダニズムの融合」代表例：シレル邸 1958 / copyright: Obra construida built work/2014/043 頁

第三期（1980-1990年代）、ほとんどすべてのプロジェクトが既存建築の活用であり、ここで新たな建築スタイルが確立され提示されている。

○代表例：SESC ポンベア文化センター

この計画は、バルディの意向により、計画敷地内の既存部分を最大限に保存し、一部のみを新築して、完成した。隣接する既存工場の小屋の壁を取り払い大空間をつくり、また吹き抜けを利用することで、ラウンジや図書館・食堂・劇場・工房など、人びとが同じ空間にいながらさまざまな活動ができるようになっている。新築部分の体育館は敷地の角にコンパクトにまとめられ、70mもの高さを持ち、ランドマークとしての機能を担っている。このプロジェクトをきっかけに、バルディは、さまざまな衰退した既存の建築を、集会場や食堂、教会など、市民のための活動の場へと復活させている。



第三期の特徴「既存建築の活用」代表例：SESC ポンベア文化センター 1986 / copyright:Obra construida built work/2014/113 頁

リナ・ボ・バルディの思考：

I 近代的な美・II 全体的な美・III 文化的な美

私は3期のどの作風にも一貫する論理性があると考えた。そこで、3つの作風変化の移行期に注目し彼女の建築表現を司っていたものを解明することで、様式変遷と思考との関係を明らかにできると考えた。〈第一期から第二期へ：都市環境への適応〉

バルディは、1957年に建築論についての論文を執筆している。論文内第1章「Concepts and meanings of architecture」にて、ブラジルの建築家が財力あるクライアントの言いなりとなっている状況が無秩序な都市の姿を導いていると言い、その現状を批判している。ブラジルの伝統的な素材を用いた建築スタイルの普及が、すべての人と同じ質の建築を提供し、それが都市環境や景観を整えようと考えたバルディは、近代的な作品を展開していた第一期とは対照的に、単純かつ質素な建築の典型を示し、それらが景観を構成することで統一感あるブラジル独自の都市がつくられることを意図した。こういった都市計画はいずれも実現することはなかったが、すべての人が同じ立場に立って都市を構成する一人としての自覚を持ち、建築家がこれを表現することこそが、建築と人びとの豊かな暮らしを深く関係づけることができるという考えを深めた。

〈第二期から第三期へ：使いこなしの発見と適応〉

その後の第三期では、既存建築に焦点を当てている。SESC ポンベア文化センターのプロジェクトにおいてバルディは、廃業したドラム缶工場地に新たに公共のスポーツ文化センターを建設する計画を依頼を受け、そのための視察に訪れた時の様子を下のように語っている。『破れた屋根から落ちてくる雨にもかまわず、子供たちは駆け回り、若者はサッカーを楽しんでいます。水溜まりに入ったボールを蹴りな

がら笑っています。この幸せをこのまま、すべてはここにあり続けなければならない。私はそう思いました。』^{※1}

労働者階級の地域で放棄された工場の中が自然と彼らが余暇を過ごす場所として生き生きと使いこなされている光景に感銘を受けたバルディは、優先すべきは、活気ある現在のアクティビティを持続促進することだと考え、計画は廃工場を最大限に保存する方針へと変更された。

『人びとがその場所を使いこなしているのなら、建築家はより使いやすく、彼らがより楽しめるように手を貸すだけでよい。』^{※2}

人びとが空間を生き活きと使いこなしている姿に美を見出したバルディは、その空間がより情緒豊かなものとなるように、直感的でポエティックな空間へと昇華させていく。ここにおいても、人びとにとつての豊かな暮らしの追求が、その根底にあることが読み取れる。

アダプティブリユース

バルディに関する既往研究における指摘の中で、その最も特徴的なものとして、“アダプティブリユース”デザインが挙げられている。これは、既存建築物を用途変更して保護と活用を両立する手法で、一般的には、荒廃した建物を復活させること自体を目的としているのに対し、バルディは、人びとが空間を使いこなしている様に暮らしを良くするヒントを見出し、その結果として、既存建築の活用につながっていることが考察できた。

まとめ

バルディの作風変化に着目し研究を行った結果、そこには共通して、すべての人びとの暮らしの向上を建築的に解決する姿勢を見出すことができた。複数の作風が在りながらも、そのどれもがブラジルの人びとに愛され使い続けられているということからも、一貫する目的を持って、深い洞察力により現状を把握し、それに対する自らの直感に基づき行動を起こすことが、単なるユートピアではない、人に仕える豊かな建築を生み出すということを、建築活動を通して伝えてくれているのではないだろうか。(2018/01/22 現在の考察)

【主要参考文献】

○ Annette Condello, Steffen Lehmann / Sustainable Lina : Lina Bo Bardi's adaptive reuse projects / Springer / 2016

○ Cathrine Veikos / Lina Bo Bardi : the theory of architectural practice / Routledge / 2014

○ 和多利奈津子/リナ・ボ・バルディ：ブラジルにもっとも愛された建築家/TOTO出版/2017

※1リナ・ボ・バルディ展/ワタリウム美術館より引用

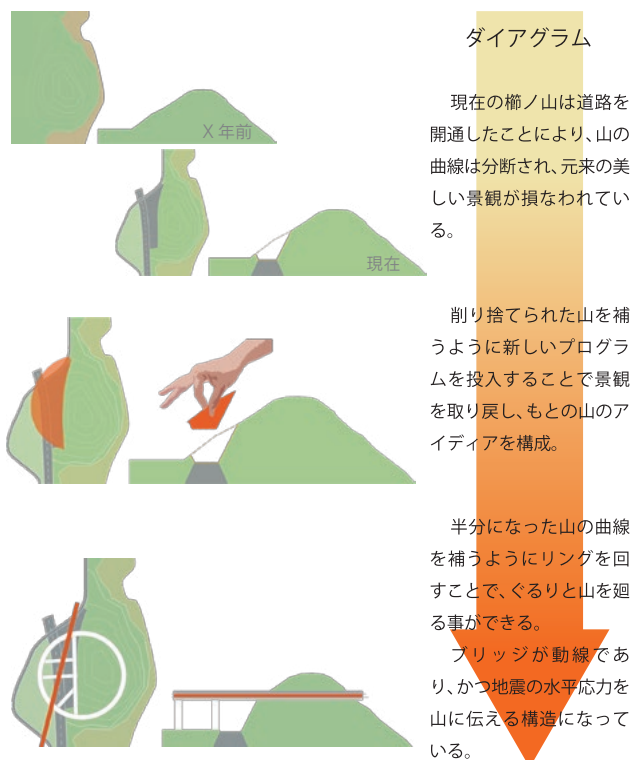
※2CasaBRUTUS <https://casabrutus.com/architecture/>14689/3より引用

サーファーロッジとみんなの家 —南海トラフ地震を想定した津波災害避難所— 図面・模型

甲斐 千尋
造形建築科学コース

日本では30年以内に70%の確率で南海トラフ地震が発生することが分かっており、その対策をすべきだと考える。私の故郷である宮崎県では、最大震度7の地震と10mを超える津波が沿岸部を襲い、4万人もの死者が出るなど、九州で最も大きな被害が出ると思われている。県は対策を始めているが避難所は未だに足りていない。

多くのサーファーや海水浴客が訪れる宮崎県日向市小倉ヶ浜も例外でなく、避難所不足という課題を抱えている。この問題を解決するため、近隣の櫛ノ山に宿泊施設を作り、小倉ヶ浜一体を補填する避難所として位置づける。櫛ノ山は道路工事で景観が失われたが、削り捨てられた山を補うように新しいプログラムを投入することで景観を取り戻し、元の山を再生する。櫛ノ山全体を避難所として認識できるように日常的に余暇活動を開放し、避難所として未来感ある宿泊施設を計画する。



プログラム

余暇活動として、

- ・遊歩道 ・マウンテンバイク
- ・キャンプ場 ・サーフィンロッジ

を開放し、市民に身近な避難所としての認識を強める。

加えて、災害時に車の乗り捨てが可能な路上駐車場を設けるなど、災害避難施設としてのプログラムを投入する。



Kureha Pear-Side Terrace projects

—高齢者主導のまちづくり—

図面・模型

玉井 志穂

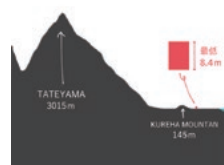
造形建築科学コース

私の生まれ育った富山市呉羽町は呉羽梨で有名であり、私はこの梨畑の美しさを残していきたい、多くの人に知ってもらいたいと考える。しかしこの呉羽地区は他地区と比べても著しい農地転用の動きがあり、また現在の住宅が梨畑に合わない建ち方をしているため、私達は梨畑を感じにくくなってしまったのが現状だ。

そこで本計画では、梨畑周辺を誘導区域と設定し、私の建築する建物に移住してもらい、将来的には梨畑と住宅の立地適正化が可能になり、呉羽をより活気づける計画だ。今回は介護予防をテーマとした高齢者棟をメインに、健康で住むのが楽しい建物を設計する。



section diagram



呉羽山越しに立山を見る



高さによって梨畑の見え方が変化する



一棟で様々な高さを体験する



変化を楽しむ

plan diagram



住戸で囲む



場所によって「差」を作る



歩くのが楽しい庭園



公共施設を散りばめる

森の中の銀河

ファイトレメディエーションを用いた
工場跡地の立地適正化

図面・模型

山形 桜水

造形建築科学コース

富山県魚津市には海と街を分断するように大きく広がる工場がある。しかし、現在はこの広大な工場敷地のほとんどが使われずに野ざらしになっており市民が近寄らないため、このままでは環境、景観、治安などの多方面に影響を及ぼすことが考えられる。そこで私は、10年後の本敷地に市民の憩いの場をデザインし、地方都市における工場跡地の新しい活用法を提案する。

具体的な案としては、植物修復という考えを利用し敷地を緑化することで汚染など工場に対する市民のネガティブなイメージを浄化し、活気ある森林公園をデザインする。また、敷地の要素として、かつて使われていた、駅からつながる引き込み線に注目した。この細長い敷地に沿ってランドスケープをデザインし、引き込み線の先に海と街を繋ぐ銀河のような建築を計画することで、人々を森林公園内へ誘導する。

50年後には緑が生い茂り、かつての閉ざされた工場がこの地方都市の輝く未来をつくりだすだろう。

